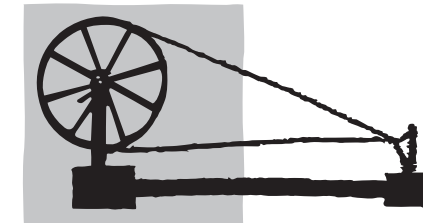


神奈川大学

国際常民文化研究機構 年報 4



「国際常民文化研究機構」のロゴ・マーク “文化を紡ぐ”



Textura Culturae

「糸車」は昭和10年代、アチックミュージアムで調査のお礼に渡していた手拭に染抜かれた民具図案の中から、日本常民文化研究所のロゴ・マーク「鋏」の生産具に対応させ、生活具から一点選びました。作図は当時の同人、藤木喜久磨によります。M・ガンジーは、機械文明の行く末を憂い、インドの農民が歩むべき道を糸車、チャルカで象徴させましたが、国際常民文化研究機構では広く「文化を紡ぐ」表徴とし、その意を豊橋技術科学大学で西洋古代史を講じ、ラテン語に造詣の深い相京邦宏先生に訳してもらいました。以下にその解説を記します。

英語のcultureに当たるラテン語はculturaですが、この言葉には「田畑を耕す」という原義がより強く含まれます。従って、この場合、cultusの方がより適切と思われます。この言葉は「人間の習慣」から「文化、教養」までより広範な意味を持ちます。或いは「文化」を人間の知識、知恵と読み替えるのなら、sapientia乃至scientiaの方が一般的かもしれません。両方ともsapio、scio「知る、理解する」の派生形です。次に、「紡ぐ」のラテン語ですが、これを「文化の集積」と捉えるなら、accumulatio（積み重ねる、accumuloの派生形）が適当と思われます。従って、一般的にはaccumulatio cultus、或いは、accumulatio sapientiae乃至accumulatio scientiaeと表現するのが無難かもしれません。が、これでは単に「文化の集積、蓄積」という意味にしかありません。研究のシンボルが糸車ということですから、「文化を織りなす」という意味ではtexo（織る、編む、組み合わせる）という単語が考えられます。この場合textura（織ること、texoの派生形） culturaeとすれば「文化の織りなし」といった意味になるでしょうか（蛇足ですが微妙に韻を踏んでいます）。これは文法的に可能な表現ということで、ラテン語に「文化を紡ぐ、編む」という概念が存在するかどうかは不明です。（佐野 賢治）

表紙写真：「四季耕作子供遊戯図巻」（神奈川県日本常民文化研究所蔵）より

この巻物は財団法人時代の常民研から引き継がれて来たもので、縦はほぼ30cm、横は約7.8m、紙本彩色の耕作図巻で、梅・桜やススキ・紅葉など季節の移ろいを示す要素を随所に配したカラフルな作品です。表紙部分は萌黄の絹地で題簽はなく、裏面は雲母引きに仕上げ、内容は正月の門付け万歳から羽根つき・凧揚げと子供の遊びで始まり、やがて種蒔浸しから俵運びまでの稲作の1年が、子供の遊びをまじえながら展開します。短い跋文と「元禄十六癸未（1703年）南呂（8月）上旬、水資和継（印）」の署名があります。